

## 三浦綾子論 - その歴史観 -

柴田 瞳

三浦綾子は、1964（昭和 39）年に『氷点』が朝日新聞社大阪本社創刊 85 年・東京本社 75 周年記念の一千万円懸賞小説に入賞したことでデビューし、1999（平成 11）年にその生涯を終えるまでの 35 年間多くの作品を残してきた。クリスチャンである三浦綾子の作品テーマは、「愛」「原罪」「いかに生きるべきか」などと多岐にわたる。

そのような三浦文学の原点は、敗戦までの 7 年間、小学校教師として「軍国主義教育」を進めた経験にある。そして、三浦綾子が作中に人間が紡いできた「歴史の悪」を取り込んでいること、自らの過去の罪を懺悔していると思われる作品に注目し、考察を加えることにした。

本研究は、三浦綾子の作品を通して、彼女にとっての「歴史の悪」とは何か、理想的な人間の生き方及び社会の在り方とは何か、三浦綾子が作品に「歴史の悪」を取り入れてきた理由を考察するものである。そして、そこから彼女の歴史観について明らかにすることを目的とした。

第一章では、「三浦文学の原点」とし、三浦綾子の原点である戦時下の教師生活、敗戦経験について触れ、そこから平和主義者へと変化する過程を論じた。また、彼女の戦争協力から浮かび上がってくる「歴史の悪」に焦点を当て、そこから創作姿勢にどのように繋がっていくのかを考察した。

第二章では、「権力と弱者」では、「歴史の悪」の構図である権力者対弱者の関係を、『細川ガラシャ夫人』（75 年）や『母』（92 年）、『海嶺』（81 年）などの代表作を用いて論じた。

第三章は、「祈りの文学」とし、クリスチャンとしての三浦綾子に焦点を当て、作中における懺悔を、『積木の箱』（68 年）や『青い棘』（82 年）など中心にまとめた。またキリスト教の先達者たちを題材にした評伝『愛の鬼才 西村久蔵の歩んだ道』（83 年）、『ちいろば先生物語』（87 年）、『夕あり朝あり』（87 年）を参考にして、三浦綾子が受けた影響について考察した。

第四章では、「三浦綾子の歴史観に見る「人間の生き方」とし、彼女にとって「なくてはならないもの」である信仰が「歴史の悪」廃絶に向けた原動力となったこと、そして彼女が考える理想的な社会の在り方、人間の生き方をまとめた。

本研究において、三浦綾子は「歴史の悪」を作中で描くことによって、全ての人間はその時代を超越することができない「平凡な人間」であること、「歴史の悪」によって弱者が被害を受けていることを訴えていることが分かった。それは、「歴史の悪」の再発を許容してきた権力者への批判である。その一方で、読者に「歴史の悪」という非人間的な世界の中でも、救いの道として、決して見捨てない者、つまり神の存在を提示している。

（指導教員 黒古一夫）